

## マーシャルの現金残高アプローチと時間概念（1）

伊 藤 宣 広

### I はじめに

Keynes [1925] や Robertson [1922] は回想の中で、マーシャルの貨幣理論は需要・供給による価値論体系の一つの特殊ケースである<sup>1)</sup>、と論じている。しかし従来の研究では、マーシャルの貨幣理論と『経済学原理』の価値論体系との関係を積極的に探究しようという試みはほとんどなされてこなかった。これにはこの分野は口承による部分が多く、ケインズら自身その内実について必ずしも明確に論じてはいないこともあって、資料的制約が大きいという事情もその理由の一旦を担っている。同時に、貨幣というものの特殊性のため、通常の価値論と同列には論じられない固有の問題も存在する<sup>2)</sup>。

そのため、ケインズらの回想がどのレベルで価値論との類似性を主張しているかは議論の余地があるが、少なくともある重要な一点において決定的な

- 
- 1) ケインズはマーシャルが次のように論じていたことを強調している。「価値の一般理論の一部としての貨幣数量説の説明。彼はいつもこういうふうに教えていた。貨幣の価値は、一方ではその供給と、他方では『各人がすぐに使える形で保有したいと望む、商品に対する支配権の平均的な手持』によって測られるその需要との函数である」(Keynes [1925] p. 29)。また、ロバートソンはケンブリッジ経済学叢書の第二巻として刊行された『貨幣』という著作の中で、それとシリーズ第一巻である H. D. ヘンダーソンの『需要と供給』との関連は「貨幣理論を価値の一般理論の中の特殊な場合として強調している点に見出される」と述べている (Robertson [1922] p. vii)。
  - 2) マーシャルの貨幣理論の位置付けを試みようとする場合にはさらに、古典派的伝統とマーシャル経済学との関係が問題になる。マーシャルは常に自分の仕事を古典派理論の現代版を提示することと考えていたが、しかしマーシャルの古典派への忠誠と、その学説との間にはしばしば緊張関係が見出される。時代遅れになった古典派の教義と、そのことを認識しつつも自分の学説と古典派との連続性を強調しようと腐心するマーシャルの姿勢は、彼の学説に「不明瞭」、「曖昧」という形で影を落としている。

対応関係が存在することを本稿では指摘したい。すなわち、考察する期間の長さに応じて需要・供給要因の占める重要性が変化するというマーシャルの価値論体系の理念がその貨幣理論において萌芽的に見られる、という点である。

この点を検証するため、本稿では価値を規定する要因としての需要と供給、そして時間という要素がそれぞれの局面でどのように関わってくるか、という観点からマーシャルの貨幣・信用・景気理論と価値論一般との関係を考察することにしたい。その際、鍵となるのがマーシャルの現金残高アプローチにおけるトランスマッション・メカニズムの分析である。

なお通常「現金残高アプローチ」と言う場合、狭義には  $M = kPO$  という方程式において産出量  $O$  と貨幣需要  $k$  を一定として貨幣数量  $M$  が物価  $P$  に比例するという数量説の比例命題を表す別バージョンとして認知されているが、本稿ではより広い定義を用いる。すなわち、数量説の比例命題を一つの経路として含みつつも、短期的な信用循環を貨幣需要を軸に主体的に分析しうる体系、換言すれば、需要・供給を背後に独自の時間概念を内包した分析的枠組みとして、マーシャルの現金残高アプローチを考察する。マーシャルの信用循環論に関して言えば、それは必ずしも貨幣需要分析に尽きるものではないが、その特徴として指摘される二つの利子率にせよ貨幣賃金の硬直性にせよ、名目値と実質値の乖離を梃子とした人々の確信の変化の態様は貨幣需要の変化に投影されるという意味で、マーシャルの信用循環論において貨幣需要の変動が重要な戦略変数となっていることは否定し難い。そのため、本稿では現金残高アプローチという用語を上記のように用いることにする。

第Ⅱ節では、貨幣価値を決定する要素としての生産費説と貨幣数量説との関係、およびその位置付けという観点から、マーシャルに大きな影響を及ぼした人物として J. S. ミルを取り上げ、ミルからマーシャルへの継承関係を跡付けるとともに、ミルとマーシャルとは貨幣理論における問題意識が変化していることを論じる。そして伝統的な数量説に対するマーシャルの不満を見た上で、

ケンブリッジ型の現金残高アプローチの本質について簡単に述べる。

第Ⅲ節ではその現金残高アプローチの意義を信用循環論における含意という観点から検討し、マーシャルの信用循環論の短期と長期のトランスミッション・メカニズムについて論じる。

そして第Ⅳ節で価値論体系との関係を考察することで、現金残高アプローチが固有の意味で時間概念を内包していること、換言すれば、価値論体系と同様、短期的には需要、長期的には供給の要因がそれぞれ貨幣価値の確定においても大きな比重を占めるといふ論理構造になっている点で独自性を有していることを述べる。

第Ⅴ節ではマーシャルの現金残高アプローチをめぐる諸問題について考察し、その意義と限界について述べる。

第Ⅵ節では比較軸として古典派および初期のケインズを取り上げ、マーシャルの現金残高アプローチのもつ過渡的性格に焦点を当て、その学説史的位置付けを試みる。そして現実の経済認識として短期的変動現象を経済の「正常状態」と見なさない点では古典派と共通しつつも、マーシャルは分析的には短期を「例外」とは見なしておらず、この点は後継者世代と共通していることを述べる。そして信用循環を一時的例外とする古典派的思考と、貨幣需要分析が積極的役割を担うケンブリッジ的思考とが混在している点で、マーシャルの議論は過渡的性格を備えたものであることを論じる。

## II マーシャルの現金残高アプローチ

### 1 貨幣価値決定における生産費説と数量説

マーシャルがその思想形成過程において J. S. ミルの経済学から多大な影響を受けたことは広く知られている。貨幣理論に関して言えば、ミルは貨幣価値は短期的には需要・供給で決まり（数量説）、長期的には生産費がその規定要因になる、と述べている（Mill [1871] p. 507）。

貨幣価値は究極的には貴金属の自然価値（需給均衡の交換価値）に一致するが、

貴金属は大変耐久性がある上、金鉱の年々の産出高は既存の貴金属ストックと比べればわずかであるため、そのような貨幣価値の自然価値への調整には時間がかかり、貨幣価値に対する生産費の影響は永続的なものに限られる。そして「貴金属の生産費における変化は、まさにその数量が増加あるいは減少する割合においてのみ、貨幣の価値に影響する」として、貨幣価値と生産費との乖離が解消されるまでの期間においては、つまり一時的には、貨幣数量と流通速度が貨幣価値を規定し得るといふ。長期命題としての生産費説とその過渡期の論理を担う数量説は、ミルにおいては補完的なものと考えられている (*ibid.*, pp. 519-522)<sup>3)</sup>。

マーシャルは貴金属の年産出高が既存ストックに比べてわずかであること (Marshall [1926] p. 177)、生産費の物価への影響が需要・供給を通じた間接的な経路によってのみであること (Marshall [1876] pp. 127-128)、こうした認識を抱いている点ではミルと共通している。

しかしミルとマーシャルとでは重大な相違点、あるいは強調点の相違がある。「今日では生産費は、貴金属の価値にかつてよりも急速に作用すると、私は考えている」(Marshall [1887] p. 201) との発言に見られるように、マーシャルは生産費の変化が将来の金属価値についての期待の変化を介して保蔵に影響を及ぼし、保蔵という貨幣需要側の要因を通じて短期的にも物価に影響を及ぼす可能性を指摘する (Marshall [1926] p. 22)。その一方で、総じてその影響はかすかなものであるとして、現実的見地からは生産費の役割をさほど重視していない。ミルは保蔵の存在を無視していたわけではないが、もっぱら流通貨幣量という観点からこの問題を捉えているため、流通にない保蔵されている貨幣は物価に影響を及ぼさない、という立場をとっている (Mill [1871] p. 515)。レイドラーは、マーシャルは古典派の先駆者から受け継いだ数量説を物価水準の一般理論に発展させ、貴金属の生産費の役割を間接的なものにまで格下げし

3) ミルにおける生産費説と数量説との関係をめぐっては様々な論争があるが、ここでは立ち入らない。同時代人では Wicksell [1898] も生産費説と数量説との関係について言及している。

た、と述べている (Laidler [1991] p. 52)。しかしマーシャルの選んだ道は単に生産費説から数量説に重点を移した、というにとどまるものではない。生産費と同時に貨幣数量の役割も格下げされ、貨幣需要の分析が大きな比重を占めるようになる。マーシャルはミルとは異なり数量説か生産費説かという問題設定をするのではなく、通常の価値論と同様、貨幣価値についても需要・供給という枠組みを包括的に適用している (Marshall [1926] p. 177)。すなわち、貨幣価値を規定する要因は何かという問題において、ミルにおける短期=需要・供給 (数量説)、長期=生産費という構図は、マーシャルになると短期=需要 (人々の心理)、長期=供給 (数量説) となっている。ミルの場合、貨幣価値決定の文脈で需要・供給と言えば数量説の比例命題のことであり、この一時的な数量説と永続的な生産費説との調和が問題となっていたのに対して、マーシャルが需要・供給という場合それは現金残高アプローチであり、後述のように数量説はその一つの経路にすぎない。そして信用循環のような短期的変動においては人々の貨幣需要が問題となり、長期的に貨幣価値を規定する要因は、究極的には生産費に依存する供給 (貨幣数量) であった。

ミルの場合は需要・供給とはいうものの、セー法則的な意味で供給とはすなわち需要を意味するため、それは事実上、供給の理論すなわち数量説を意味していた。マーシャルが需要・供給という場合にはこれとは意味合いが異なることに注意が必要である。

確かにマーシャルは時として妥協的な説明を行っており、需要・供給=数量説というミルの用法を踏襲している箇所も存在する。『貨幣信用貿易』付録Cに見られる説明がその一例であるが (Marshall [1923] pp. 282-284)、これは他の事情が等しい場合の数量説の比例命題の定式化を指している。しかし基本的には広義の現金残高アプローチとして貨幣需要の分析を掘り下げ、人々の心理・ポートフォリオの選択にまで分析のメスを入れている。本格的な貨幣需要分析はミルにはなく、その意味で需要・供給を兼ね備えた貨幣理論はマーシャル独自のものであるといえる。

## 2 数量説と現金残高アプローチ

マーシャルの数量説に対する態度は依然、古典派のしがらみを纏いつつも、そこから着実に前進している。このテーマは出版された著作では体系的に展開されることはなかったが、各種委員会での証言は興味深い示唆に満ちている。マーシャルは「数量説」という学説を「通貨の単位の価値は、他の事情が同一であるならば、単位の数と流通速度に逆比例して変化する」(*ibid.*, p. 48)と定義している。数量説の定義をめぐる様々な議論があり得るが、当時マーシャルが貨幣数量説をそのような比例命題として認識していたこと (Marshall [1926] p. 267)、換言すれば過渡期の議論は数量説の一環とは認められていなかったこと、またそうした認識を「周知のもの」と考えていたということ、この歴史的事実は軽視されるべきではない。マーシャルの考えではそのような伝統的な数量説は「他の事情が等しいとすれば」自明の理であり、この条件節を認めなければ到底成り立ち得ないものであった。

そして「他の事情」とはマーシャルによると、「(a) 人口、(b) 人口一人当たりの取引の量、(c) 貨幣によって直接営まれる取引の割合、そして (d) 貨幣の効率 (ないしは平均の流通速度)」(Marshall [1923] p. 48) 等であり、また、事業量・支払い方法の変化等も考慮する必要がある (Marshall [1926] p. 22)。マーシャルはこの「他の事情が等しければ」という条件節の重要性を至る所で強調しており、数量説の比例命題よりもむしろ重要でさえあるという (*ibid.*, p. 21, p. 34, p. 48)。こうした「他の事情」が等しくないような過渡期を認める議論はマーシャル以前にも広く流布していたが、それはあくまで数量説とは別の論理であり、例外的な逸脱過程として認知され、積極的な理論的分析対象として取りあげられることはなかった。

マーシャルは伝統的な数量説の孕む困難を次のように指摘している。「一般に財は生産者から消費者への過程で多数のしかし異なる数の人の手を経る、という事実」は「流通速度と貨幣価値との関係を確立しようと試みる」際には大きな困難をもたらす (Marshall [1871] p. 169)。それ故にマーシャルは取引流

通速度の概念を放棄した。「ミル氏はその不都合に気付いてはいたが、救済策を指摘することはなかった」(*ibid.*, p. 169)<sup>4)</sup>。

マーシャルはこの問題を回避し得る代案として、1871年の草稿で流通速度概念を用いない現金残高型のモデルを提示している<sup>5)</sup>。それは周知の通り、公衆の動機・決意という視点を明示的に取り入れることで、貨幣保有と支出との便益のバランスを表現している点が特徴である (Marshall [1871] p. 167, Marshall [1923] pp. 38-39)。シュンペーター (Schumpeter [1954] p. 1109) やエシャグ (Eshag [1963] p. 65) はこのマーシャルの貨幣需要分析はケインズの流動性選好説の起源であると述べている。そこでは貨幣需要は人々の主観的要因の変数となっているが、このいわゆる「マーシャルの $k$ 」を変化させる要因として、マーシャルは次のようなものを挙げている。

「通貨の量と物価の一般水準の間のこのような関係は、第一には総所得を変化させる人口と富の変化によって、第二には通貨に対して他の支払い手段を代替させる信用機関の発達によって、第三には生産と流通の過程で商品が人手を通る回数に影響を与える輸送、生産および商業一般の方法の変化によって、永久的に変化するかもしれない。また、一般的な商業上の確信と活動の変動によって、一時的に修正されるかもしれない」(Marshall [1923] p. 45, Marshall [1926] p. 268)。

$k$ は富や慣習に依存し、長い期間をとれば変化もするが、趨勢として安定的に変化すると考えられる。時には確信の変化等によって一時的に急激な変動を見せることもあり得るが、これは信用循環の文脈で語られる。所得のみでなく富も $k$ の規定要因であるという点は注目に値するが、残念ながらマーシャルは

4) 流通速度の問題について、ミルは【原理】第3篇第8章第3節において次のように述べている。「流通速度という言葉は、この言葉をもって言い表すべき重要性を多少とも持っているところの唯一のものを言い表すにはきわめて不適當であり、かつこの言葉が表すべき意味とは全く違った意味を暗示することによって問題を紛糾させる傾向をもっており、それであるから、この言葉を廃止して、伝えるべき観念を直接に意味するところの他の言葉に代えることができるならば、それは真に結構なことであろう」(Mill [1871] p. 513)。

5) モデルの概略については Laidler [1990] (pp. 53-55) 参照。

フローとストックの区別を意識した議論を積極的に展開してはいない。また1871年の草稿で、マーシャルは伝統的な数量説をもフィッシャー流の交換方程式で定式化している (Marshall [1871] p. 169-170)。ただしそれは、流通速度概念の問題点を指摘する文脈で述べられているのであり、あくまで批判の対象であることに注意する必要がある。マーシャルは自分の貨幣需要分析を必ずしも数量説だとは考えていない<sup>6)</sup>。マーシャルにとって現金残高アプローチは単なる「数量説」の変種ではなく、貨幣理論におけるマーシャル体系全体の縮図というべきものである。その理由は以下で述べる。

### III 信用循環論におけるトランスミッション・メカニズムと 現金残高アプローチ

マーシャルは物価水準に関する議論において、2種類の価格変化を区別する必要がある、と述べている。「急速に去来する一般物価の変動と長期間にわたる変動を区別しなければならない」(Marshall [1887] p. 192, Marshall [1923] p. 19) として、短期・長期の変動をそれぞれ、年々の変動と連続する十年の平均物価に投影する形で議論を進めている。

先の議論との関連で言えば、短期的な変動は人々の貨幣需要という心理的要

6) 既に述べたように、マーシャルには古典派への配慮から妥協的な説明をしている箇所も見られるが (Marshall [1923] pp. 282-284)、これはマーシャルの古典派への忠誠がマーシャル経済学の曖昧さを招いている一つの例である。

実際、Eshag [1963] はマーシャルが他方で数量説の古典的形態をも用いていたことを示唆している。「マーシャルが貨幣数量説の現金残高的形態と古典的形態のどちらを選ぶかは、彼がたまたま取り扱った問題の性格によって主に決定された」(Eshag [1963] p. 5)。エシャグは短期の価格「変動は、事業の期待と信頼の変動によってしばしば生ずるのであって、数量説の現金残高的形態をマーシャルが十分活用するのは、信頼状態や期待の変化が貨幣の価値に及ぼす影響について説明する場合である」(ibid. p. 6) と述べている。これは事態の説明としては正しいが、短期の価格変動においては現金残高方程式における変数のうち非数量説的要素が重要となり、長期の価格変動では数量説的要素が濃厚となるという論理を捉えそこなっている。現金残高アプローチが伝統的な数量説と外見的に相違を見せる局面、換言すれば、伝統的な数量説ではうまく説明できない状況を明示的に扱える局面が短期であるにすぎないのであって、そもその適用可能範囲を無視して両者を代替的な説明と見るのでは現金残高アプローチの意義を正当に評価したことにはならない。



因が大きく作用する信用循環の過程であり、長期的な変動は趨勢として数量説の比例命題が概ね妥当するような局面である。実際、マーシャルはこの2つの変動を区別するよう示唆してはいるものの、マーシャルの与えている説明・叙述は時に両者が混在していて明確とは言い難い<sup>7)</sup>。

マーシャルは信用循環の過程で産出量の変化を明示的に語っていない<sup>8)</sup>ため、現金残高方程式の枠組みで見ても、人々の貨幣需要（マーシャルの  $k$ ）が重要な戦略変数となっている。すなわち、短期の信用循環においては  $k$  が激しく変動し、 $k$  と物価水準  $P$  との因果関係が重要となるが、長期的には  $k$  の変動は均され、貨幣数量  $M$  と物価水準  $P$  との間に相関関係があるかのような外観を呈するに至る。

マーシャルの長期の物価趨勢に関する議論では、シティへの貴金属の流入が物価騰貴をもたらす長期のトランスミッション・メカニズムが論じられる (Marshall [1923] pp. 256-257, Marshall [1926] pp. 51-52)。ここでは産業の状態は一定とされ、貨幣数量は実物要因に対して中立的である。この過程は貨幣数量の増大が物価騰貴をもたらす、新たな均衡物価水準に到達することで落ち着くが、このような貴金属の流入から生じる価格変化は「さざなみ」にすぎず、経済の実物面に対して永続的な変化をもたらすものではない。ただ、企業の方法等、他の事情が不変であれば、諸個人が取引動機・予備的動機のために保有する現金通貨の量は貴金属の増加にあわせて増大するため、上昇した価格水準のみは持続する。長期的には貨幣数量の増大と価格の上昇だけが残り、

7) Gaynor [1991] はマーシャルの貨幣理論における物価趨勢の議論と恐慌の議論とが従来、十分に区別されてこなかったとして、両者のそれぞれについてその特徴を検討している。

8) マーシャルが産出量よりも価格の変動を重要な問題と考えた背景には、デフレに特徴付けられる1870年代以降の大不況という事情があった。20世紀初頭から問題となり始める失業といった現象はまだ深刻な経済問題とはなっていなかった。例えば1888年の金銀委員会での証言でマーシャルは、「この不況の間、労働者階級のうち通常よりもより多数が失業しているか否かに関する事実について」コメントを求められた際、「私の考えでは、ここ10年の間、他のいかなる連続的な10年間と比べても、より多くの人が失業していたとは言えません。もちろん、現在では1872-73年よりは多くの人が失業しています」(Marshall [1926] p. 99) と回答している。

また時代の問題が産出量ではなく物価であったという事情に加えて、Wolfe [1956] が指摘しているように、統計データの未発達という事情もある。

これは数量説の世界であるということが出来る。現金残高アプローチが数量説的装いを纏う長期の局面である。

いま一つのマーシャルの短期の物価変動に関する議論が信用循環論にあたる。マーシャルは景気循環の説明にあたって、常にオーヴァーストーン卿の次の言葉に言及している。

「市況は明らかに確定的な循環を画いて展開する。最初に市況は平穏状態にある。——ついで改善——確信の成長——繁栄——興奮——過熱——激動——逼迫——停滞——窮迫——そして再び平穏に終わる」(Marshall & Marshall [1879] p. 153, Marshall [1923] p. 246)。

それは楽観・悲観といった確信の変化が投機を助長して金融恐慌を誘発する局面を描いたものであり(Marshall & Marshall [1879] p. 152-153, Marshall [1923] pp. 249-251), その叙述スタイル自体は古典派の J. S. ミルやバジョットの描写と大差はない。ここで古典派的な信用循環論とマーシャルのそれとを隔てるものは、マーシャル独自の貨幣需要分析である。すなわちマーシャルによると、人々は将来価格が上昇すると考えるか下落すると考えるか、その期待に応じて資源を現金の形態で保有することから生じる利益を、同じ資源を別の用途に支出することから生じる利益と比較考量する。例えばブームの時にはインフレが進行して貨幣価値が急速に下落するため、人々は現金残高の保有を減らしてその他の形態に支出し、 $k$ は劇的に低下する。

「このような不確実性の結果として、物価が上昇すると思われる時には、人々は貨幣を借り入れて財を購入しようとして殺到し、それがまた物価の上昇を助長し、事業は膨張し、向こう見ずに、浪費的に運営され、借り入れた資本で仕事をする人々は借り入れたよりも少ない実質価値を返済することになり、社会の犠牲において富むことになるであろう」(Marshall [1923] p. 18)。

上の引用文に見られるように、このことは実質利子率と名目利子率の乖離(Marshall [1887] pp. 190-191, Marshall [1920] p. 594, Marshall [1923] pp. 17-18)<sup>9)</sup>、

9) 2つの利子率の区別は後にフィッシャーも行っているが、両者の間にはその含意において若干ノ

貨幣賃金の硬直性 (Marshall & Marshall [1879] p. 156, Marshall [1887] pp. 191-192, Marshall [1923] pp. 18-19, Keynes [1925] p. 192) といった要因がそれぞれの階層に及ぼす影響と密接に関連している。マーシャルによると、名目利子率の調整は緩慢であるとの想定のもと事業家が借入れを行い、返済するまでに名目利子率が不変で物価が騰貴するならば実質利子率は低下する。このことがさらに投機を煽る。逆もまた同様である。

またブームの時には物価上昇に賃金上昇が追いつかず、実質賃金は低下する。これは雇主にとっては追い風となるため、彼らを実力以上の冒険に乗り出させる点で有害であるとマーシャルは論じている。実質賃金は「物価が上昇しつつあり、貨幣の購買力が下がりつつある時に下落する。そのために雇主の利潤が他の原因で最大となるちょうどその時期に、普段よりも少ない実質賃金と俸給を支払い、そのために自らの力を過大評価し、潮流が変わりはじめた後には続けることができなような冒険に乗り出すように促される」(Marshall [1923] p. 18)。これには「国民の所得の……いま一つの大きな部分は、名目価値の変更に大きな摩擦が伴う俸給と賃金からなっており、そのために貨幣の購買力のあらゆる変化につれて、実質価値が絶えず変動する間も、名目価値は原則として不変にとどまる」(Marshall [1887] p. 189) という認識が背後にある。

そのため、この信用循環の局面では確信の変化や動向に応じて人々がその資源を現金残高の形態で保有しようとする量は大きな変動を蒙る。しかしこの間、マーシャルは産出量の変化を視野に入れていない。突き詰めていけば、信用循環のプロセスにおいてもマーシャルは暗に完全雇用を想定し、産出量一定の仮定を

---

の相違がある。マーシャル、フィッシャー共に、物価変動に基づく名目・実質利子率の乖離が景気循環において重要な役割を果たすと考えている点は共通しているが、フィッシャーにおいては名目利子率調整の遅れが企業家の利潤を変化させ、利子率の調整が終わるまで事業が拡張あるいは収縮する、というメカニズムになっている (Fisher [1911])。他方、マーシャルの場合は、名目利子率が比較的安定的との想定の下で、物価変動に基づく名目・実質利子率の乖離が企業家に楽観・悲観のムードを植え付け、それがもたらす投機的 성격が強調されており、この投機が循環を激化させると考えている。心理的・投機的要素を重視する点で、マーシャルの方がより古典派に近い。マーシャルとフィッシャーとの比較一般に関しては Laidler [1991]、ヴィクセルとの対比に関しては岡田 [1993] が詳しい。

採っている。そのため、 $k$ の変動は直接に物価  $P$  (すなわち裏を返せば貨幣価値) に跳ね返ることになる。これは一時的ではあれ、貨幣需要要因が貨幣価値の確定において重要な役割を果たしていることを意味している。

ここで論じられているのは、現金残高アプローチの枠組みで言えば  $k$  と  $P$  との因果関係であり、もはや「貨幣数量」説とは事実上無関係である。

こうしてみると、マーシャルは長期の数量説の論理も短期的な貨幣需要の変動に基づく貨幣価値の変化もともに現金残高アプローチという枠組みで統一的に把握し得ていることがわかる。マーシャルの現金残高アプローチが価値論体系の縮図であるというのはこの意味においてである。マーシャルが他の数量説論者と異なるのは、需給要因の重要性が扱う期間に応じて変化するという『原理』の価値論体系との対応関係を背後に備えている点であり、またこの独自の短期の貨幣需要分析に「数量説の例外」といったネガティブな位置付けを付与していない点である。マーシャルは貨幣価値に関しては長期の比例命題という帰結よりも人々のポートフォリオ選択がもたらす短期的帰結の方をはるかに重視している。短期的現象が平均をとれば長期に飲み込まれるという理解は、必ずしも短期が長期よりも重要性において劣るということの意味するものではない。そこには長期的には成り立つであろう命題とそこから短期的な逸脱過程、という古典派的構図ではなく、供給要因が支配的となる長期と需要要因が支配的となる短期、という『原理』の時間構造の理念を読み取ることができる<sup>10)</sup>。

#### 参考文献

- Bagehot, W. [1873] *Lombard Street: A Description of the Money Market*, London, P. S. King. (宇野弘蔵訳『ロンバード街——ロンドンの金融市場——』岩波文庫, 1941年)。

10) 一般に、19世紀後半から20世紀初頭にかけて現れた新古典派の貨幣数量説は過渡期の分析にも力を注いでおり、短期の過渡期と長期の帰結のいずれを重視するかは重要な論点である。本稿でマーシャルの現金残高アプローチが短期と長期を内包するという場合、通常の新古典派の数量説とは異なる固有の意味においてであることをここでは強調したい。

- Bigg, R. J. [1990] *Cambridge and the Monetary Theory of Production: The Collapse of Marshallian Macroeconomics*, Basingstoke, Macmillan.
- Bridel, P. [1987] *Cambridge Monetary Thought: The Development of Saving-Investment Analysis from Marshall to Keynes*, Houndmills, Basingstoke, Hampshire, Macmillan.
- Eshag, E. [1963] *From Marshall to Keynes: An Essay on the Monetary Theory of the Cambridge School*, Oxford, Basil Blackwell. (宮崎厚一訳『マーシャルからケインズまで』東洋経済新報社, 1967年)。
- Fisher, I. [1896] *Appreciation and Interest*, Reprinted 1965, New York, Augustus M. Kelly.
- [1911] *The Purchasing Power of Money: The determination and relation to credit, interest, and crisis*, New York, Macmillan. (金原賢之助・高城仙次郎訳『貨幣の購買力』改造社, 1936年)。
- Gaynor, W. B. [1991] "Price Trends and Economic Crises in Marshall's Monetary Theory," *Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 13, pp. 37-53.
- Hicks, J. [1965] *Capital and Growth*, Oxford, The Clarendon Press. (安井琢磨・福岡正夫訳『資本と成長 (I・II)』岩波書店, 1970年)。
- Hutchison, T. W. [1953] *A Review of Economic Doctrines, 1870-1929*, Oxford, Clarendon Press. (長守善・山田雄三・武藤光明共訳『近代経済学説史 (上・下)』東洋経済新報社, 1957年)。
- Kahn, R. F. [1984] *The Making of Keynes' General Theory*, Cambridge, Cambridge University Press. (浅野栄一・地主重美訳『ケインズ『一般理論』の形成』岩波書店, 1987年)。
- Kate, S. [1998] *Say's Law and The Keynesian Revolution: How Macroeconomic Theory Lost its Way*, Cheltenham, Edward Elgar.
- Keynes, J. M. [1911] "Review of Irving Fisher: The Purchasing Power of Money," *Economic Journal*, Vol. 21, pp. 393-398.
- [1923] *A Tract on Monetary Reform*, London, Macmillan. (中内恒夫訳『貨幣改革論』(ケインズ全集4) 東洋経済新報社, 1978年)。
- [1925] "Alfred Marshall, 1842-1924" in *Memorials of Alfred Marshall*, ed. by Pigou, A. C., London, Macmillan, pp. 1-65.
- Laidler, D. [1990] "Alfred Marshall and the Development of Monetary Economics" in *Centenary Essays on Alfred Marshall*, ed. by Whitaker, J. K., Cambridge, Cambridge University Press, pp. 44-78. (橋本昭一監訳『マーシャル経済学の体系』ミネルヴァ書房, 1997年)。

- Laidler, D. [1991] *The Golden Age of the Quantity Theory: The Development of Neoclassical Monetary Economics 1870-1914*, Princeton, NJ, Princeton University Press.
- Marshall, A. [1871] "Money" in *The Early Economic Writing of Alfred Marshall*, 2 vols, ed. by Whitaker, J. K. 1975, London, Macmillan.
- [1876] "Mr Mill's Theory of Value" in *Memorials of Alfred Marshall*, ed. by Pigou, A. C. 1925, London, Macmillan, pp. 119-133.
- [1887] "Remedies for Fluctuations of General Prices" in *Memorials of Alfred Marshall*, ed. by Pigou, A. C. 1925, London, Macmillan, pp. 188-211.
- [1920] *Principles of Economics: An Introductory Volume*, 8th ed., London, Macmillan (1st ed. 1890). (永澤越郎訳『経済学原理 (1-4)』岩波ブックサービスセンター, 1985年)。
- [1923] *Money, Credit and Commerce*, London, Macmillan. (永澤越郎訳『貨幣信用貿易』岩波ブックサービスセンター, 1988年)。
- [1926] *Official Papers by Alfred Marshall*, ed. by Keynes, J. M., London, Macmillan.
- and Marshall, M. P. [1879] *Economics of Industry*, London, Macmillan. (橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部, 1985年)。
- Mill, J. S. [1871] *Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy*, 7th ed., Reprinted 1965 in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. II, III, ed. by Robson, J. M., Tront University Press. (末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫, 1959-1963年)。
- Opie, R. [1931] "Marshall's Time Analysis," *Economic Journal*, Vol. 41, pp. 199-215.
- Patinkin, D. [1965] *Money, Interest and Prices: An Integration of Monetary and Value Theory*, 2nd ed., New York, Harper and Row. (貞木展生訳『貨幣・利子および価格——貨幣理論と価値理論の統合——』勁草書房, 1971年)。
- Pigou, A. C. [1917] "The Value of Money," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 32, pp. 38-65.
- Robertson, D. H. [1922] *Money*, Cambridge, Nisbet and Cambridge University Press.
- [1959] *Lectures on Economic Principles*, Vol. 3, London, Staples Press. (森川太郎・高木昇訳『経済原論講義Ⅲ』東洋経済新報社, 1962年)。
- Schumpeter, J. A. [1954] *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press. (東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店, 1956-1962年)。

- Wicksell, K. [1898] *Interest and Prices: A Study of the Causes Regulating the Value of Money*. Translated by Kahn, R. F. for Royal Economic Society 1936, Reprinted 1965 New York, Augustus M. Kelly. (北野熊喜男・服部新一訳, 北野熊喜男改訳『利子と物価』日本経済評論社, 1984年)。
- Wolfe, J. N. [1956] "Marshall and the Trade Cycle." *Oxford Economic Papers*, Vol.8, pp. 90-101.
- 伊藤宣広 [2002] 「D. H. ロバートソンの産業変動論とマーシャル的伝統 (1) ——大陸経済学とセー法則——」『経済論叢』第170巻第3号, 57-73ページ。
- [2003] 「D. H. ロバートソンの産業変動論とマーシャル的伝統 (2) ——物価変動およびケンブリッジ学派のマクロ分析——」『経済論叢』第171巻第1号, 69-85ページ。
- 岡田元浩 [1993] 「貨幣経済理論史におけるマーシャルの位置——とくにヴィクセルとの比較において——」(井上琢智・坂口正志編『マーシャルと同時代の経済学』ミネルヴァ書房)。
- 根井雅弘 [1989] 『マーシャルからケインズへ——経済学における権威と反逆——』名古屋大学出版会。
- 馬渡尚憲 [1997] 『J. S. ミルの経済学』御茶の水書房。